

「ICT活用教育管理職研修」「ICT活用推進委員会」

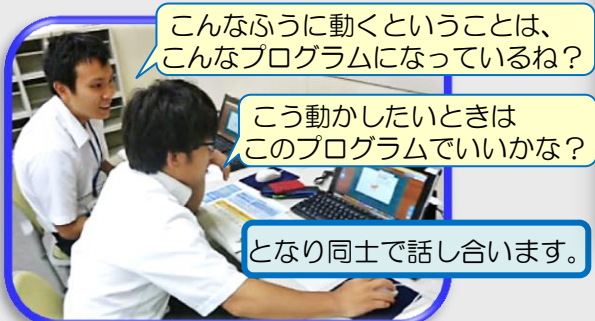
校長先生・ICT推進委員の先生がプログラミングに挑戦！

新学習指導要領により、2020年から小学校でも「プログラミング教育」が必修化されることになりました。そこで、「ICT活用教育管理職研修」（6/6実施・市内25校の校長先生が参加）と「ICT活用推進委員会」（6/30実施・各校ICT推進委員の先生が参加）において、信州大学の東原義訓教授から「プログラミング教育」についてのご指導をいただき、先生方はビジュアルプログラミング言語として文部科学省が公開している「プログラミン」を体験されました。

各校の校長先生とICT推進委員の先生が同様の体験をされたことで「今後、本校でプログラミング教育をどのように進めていくか」を検討していく出発点に立ちました。



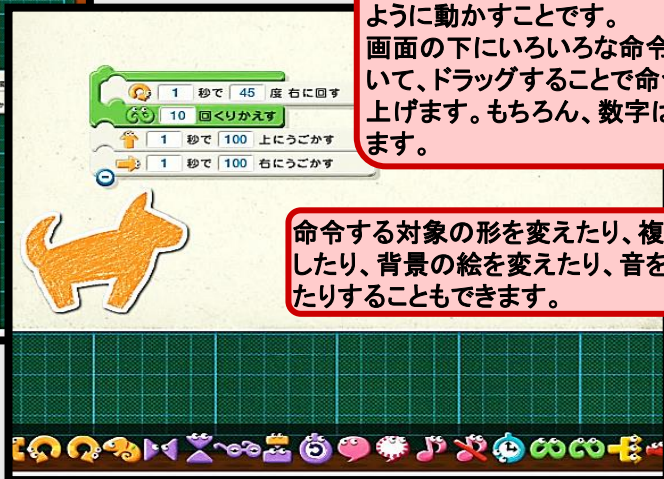
校長先生も真剣な表情で取り組まれています。



こんなふうに動くということは、
こんなプログラムになっているね？

こう動かしたいときは
このプログラムでいいかな？

となり同士で話し合います。



「プログラミン」の第一歩は、画面に出てくる犬にいろいろな命令をし、思ったように動かすことです。
画面の下にいろいろな命令が並んでいて、ドラッグすることで命令を積み上げます。もちろん、数字は変えられます。

命令する対象の形を変えたり、複数にしたり、背景の絵を変えたり、音を出したりすることもできます。



「このアニメーションの中で起こっていることを全部言ってください」との課題。「後ろで地球が回り続けている」「うさぎが石ののったらジャンプする」「ずっと音楽が鳴っている」などなど、順番に出てきましたが、校長先生もICT推進委員の先生も「全部」見つけるのはとても大変でした！何気なく見ているアニメーションも、すべて細かいステップに分けられ、プログラムで「命令」されていることを実感されたと思います。

＜「プログラミング教育」をしていくときの「可能性」と「盲点」＞ … 東原教授のお話

子供たちがどんどんプログラムを作れるようになると、偶然に面白いものができてしまったりします。もともとやりたかったことと違ってこれでもいいや！となることもあり、「自由に作品を創っていきましょう」という方法だけでやると、面白いものは作れても、「このようなものを作りなさい」と課題が出た時にその通りのものが作れないことがあります。現実の問題を解決できるようになるためには、条件を満たすプログラムを作れることも重要です。

要求された課題通りにプログラムが作れることは、業務でのプログラム作成にはとても大切ですし、偶然に出来る面白さは芸術系で評価されます。どちらも大事ですがどちらかになってしまいがちです。子供たちはいずれはがどちらかに分かれるとしても、小中学校では両方をバランスよく育てられたら良いと思います。